
噛様

草月叶弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噛様

【Nコード】

N8979X

【作者名】

草月叶弥

【あらすじ】

起きたら知らないところにいました。

カミサマ？なにそれ？

とりあえず子供たちが応援してくれるようなのでカミサマ業務、頑張ってみます。

初投稿なので拙い所も多々あると思いますがよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

ノリと勢いで書いた作品ですが、よろしくお願いします。

プロローグ

「カミサマだー！！ほんとにいたああ！！！」

あまりの騒がしさに私は閉じていた眼を開け、のそりと身体を起こした。

ところでここはどこだろうか？

何時ものように末の子供と遊んでやり、力尽きた子供と一緒に散歩に出るまでの間、うたた寝をしていたはずなのだが？

目の前には見たことのない子供たちが
「カミサマだー！！」「おつきいねえ」
などと話している。

ん、これは夢だな。

こんな子供たちは見たこともないし、そもそも私はカミサマとやらではないし。

そう結論づけて、起こした身体を横たえると再び目を閉じた。

起きたら寝てた。

再び目を開けたら、先ほどなにも変わっていなかった。

くあ…とアクビをして辺りを見回すと少し日が傾いているので、どうやら夕方になっていているようだ。

夢のはずなのに何で起きても同じ場所なのだ？

なぜか騒いでいた子供たちも周りに寝ているし。

意味がわからないが、とりあえずこのまま寝かせておくわけにはいかないだろうと思い、起こすことに決めた。

決めたのはいいが、どうやって起こそう？

吠えるのは却下。（前にやって怒られた）

では舐めるか。

舌を出して手近な子供の顔をペロツとな……………ん？

ペロツと舐めようと思ったら何だかやたらと長い舌が…しかも先っぽふたつに割れてるし。

そういえば子供たちも言葉が達者な割りに身体が小さいな。とは思っていたがどういうことだ？

夢だからなのか？

考えても分らないので、先に子供たちを起こすことにする。

自分では、ペロツ…のつもりが油断するとベロツ…になるのやらと気を使うことになり、全員を起こした頃には妙な疲労感に襲われていた。

誰か説明してくれる人を求む。

起こされた子供たちはなぜか部屋の隅に固まってヒソヒソと話し合
いをしている。

やはり舐めて起こしたのがいけなかったのだろうか？

でも昔、寝てる子供の近くで小さく吠えて起こしたら大泣きされた
上にこっぴどく叱られたので舐める以外の選択肢はほぼなかったの
だが……

それともペロツ…を失敗してベロツ…になった子がいたのがいけな
かったのだろうか？

とりあえず子供たちが静かにしてる間に自分の身体を確認してみる。
先ほど気付いた舌はやはり記憶よりも長く、先っぽは二つに割れて
いる。

その舌で歯列をなぞると鋭い牙が上下二本づつ、計四本あった。そ
の他の牙も何だかやたらとがっているようだ。

前肢はどうなっているのかと視線を向けると、毛の色が違った。
銀色だった。

しかも狼などのくすんだ銀色と違い、きらつらのピカピカだ。自己
主張が激しいにもほどがある。

ぐぐぐ…と身体を丸めて後ろを見ると身体も全部同じ色だった。尾
は三本あったが。

あ、前肢は普通だった。サイズが前の倍以上あるようだったが。あ
と、爪が出し入れ可能だったが。

これ以上は自力で確認するのは無理だったため、諦めて先ほどと同
じように寝そべると、子供たちがこちらをじっと見つめていた。

相談は終わったのだろうか？

起き上がるうとしたら、ビクツ…と怯えられたため、寝そべったま
ま怖くないことをアピールするために優しく

「怖くないぞ」

……………んん!?

今、喋らなかつたか!?

優しく「わうん」と吠えるつもりだったんだが??

子供たちもびつくりして固まっている。

泣きそうな子までいる。

泣かれると面倒だし、怖くないことを分かってもらわないといけな
いのもう一度やさしく…

「怖がるな」

くっ…なんで「わうん」じゃなくて「怖がるな」になるんだ!声も
囁れてるし、余計に怖がらせているじゃないか!!

どうしたら良いのか分からず悶々としてしていると、比較的身体の大き
な子供がおずおずと声をかけてきた。

「あのお…カミサマ…ですよね?」

「……………?」

カミサマ?何だそれは??

聞き返したいが、多分出るのは囁れた声なので、首をかしげてみる。
疑問は通じたようで子供たちは皆で一斉に喋りはじめた。

「僕たちカミサマに出てきてほしくて一生懸命祈ったんです!」

「カミサマならーちゃんやとなりおばちゃんやミーちゃんを助け
られると思って!」

「だからカミサマ!」

「助けてください！おねがいしますー！」

「「「おねがいしますー！……」」」

お願いされてしまった……

それはいいのだが、ここはどこで何でこんなところにこんな身体でいるのか誰か説明してくれる人を求む。

切実に。

誰か説明してくれる人を求む。(後書き)

ご意見、ご感想お待ちします！誤字、脱字等あったら教えてください！
さい！

どうなることやら。(前書き)

いつまで毎日更新できるかなあ？

どうなることやら。

さて、お願いされたのはいいが事態を全く把握できていない。喋れば泣かれるかもしれない。

だが、喋らなければ何もわからない。

子供に泣かれるのは本当に嫌いなんだが……仕方がない。

頭を下げたままチラチラとこちらを伺ってくる子供たちが泣かないように祈りながら、話しかける。

「顔を上げなさい。」

やさしく言ったつもりだが、やはり囁れ声と身体の大きさに怖がらせてしまったようだ。

一番小さな子供が震えながら大きな子の陰に隠れてしまった。他の子達も震えてはいるが再度促すとゆっくりと顔を上げた。

うん、何て言うか、美形ばっか。

やたらとかわいい子が多い気がする。

男の子三人と女の子の二人の総勢五人。

人間の年齢は分からないが、まだ親の庇護下にいるべき年齢だろう。一番はじめに話しかけてきた男の子がリーダーだろうか？身体も一番大きいし。

「その少年。お前がリーダーか？」

「……っ！？はいっ！！」

突然話しかけられて驚きながらもしっかりと答える。

これなら話しはできそうだな。

「お前はこの状況が説明できるか？」

「……………」

「できないのならば、できる人間を連れてきなさい。」

「……………」

沈黙されてしまった。

難しいことを言っただけもろは無いのだが、やたらと悲壮感が漂っているのは何故なのだろうか？

何だか嫌な予感がするので、それを打ち消すべく話を続ける。

「何故答えない。」

「そ……それは……………」

「……………説明できる人間がいないのか？」

そう、それが一番怖い。

だがそれは「そんなことないよ！」と、即座に否定された。

「ならば、何故？」

問い返せば「うう……」と唸って、そわそわとよそ見を始めた。他の子達も何だかそわそわしている。

その様子を見ながら、今の話をまとめてみると

- ・子供たちにはこの状況を説明できない。
- ・大人には説明できる人間がいる。
- ・子供たちはなぜか大人には知られたくないようだ。

簡単だった。

「お前たち、大人には秘密でここにきたな？」

「……………！？なんで！？」

何で分かったのかと聞きたいのだろうか？態度でバレバレなのだが……。

とにかく自分の状況を把握するためにも子供たちには犠牲になってもらうしかない。

言いつけを守らなかった子供にはお仕置きが必要だろう。

「家に戻って、大人に説明してきなさい。

そして誰か説明ができる人間を連れておいで。」

私の言葉に子供たちには泣きそうになる。

「泣かなくてもいい。

ただ、今日はもう遅い。連れてくるのは明日にきなさい。

わかったね？」

につこり笑うと、子供たちは目に涙を浮かべながらこくこくと頷いたあと、手を繋いでしょんぼりと帰っていった。

何はともあれ、一歩前進だ。

初めて人の言葉を喋って予想以上に疲れたし、お腹もすいた。

だがここには食べれるようなものは何もない。

建物の周りを一周すると水が入った入れ物があったのでそれで喉を潤し、元の場所に戻って寝そべると、私なりにこの状況について考えることにした。

どうなることやら。(後書き)

誤字・脱字等あったら教えてください。感想下されると泣いて喜びます(笑)

思考（前書き）

少しシリアス気味です。

思考

まず最初に不思議なのは何故喋れるかということだ。

私は喋った事などない。

人が話す言葉を多少理解することはできたが、自ら喋る事など出来なかった。

そこまで考えて新たな疑問が出てきた。

何でこんなことを考えることができる？

私の思考はこれほど複雑では無かったはずだ。そもそも考えるということをあまりしたことがない。

寝て、起きて、食事をして、家族と過ごす。

教えられたことをこなし、言いつけを守る。

そんな簡単な日々だったはずだ。

何かがおかしい。

いや、全てがおかしい。

——そもそも何故、私はここにいいのか——

夢だと思っていた。だから寝て、起きれば良いと思っていた。

なのに起きたら子供たちと一緒に寝ていたことに驚いて忘れていた。

——ここはどこなのだろう？——

——家族はどうしているのだろう？——

そう考えて私はハッとした。

家族、そう、家族だ。何故忘れていたのか。

優しい父と怒ると少し怖いがご飯をくれる母。毎日ダイエットだと言って散歩に連れていってくれた姉に年の離れた末の子供。

昼寝から起きたら一緒に遊ぼうと言っていた末の子供は泣いていないだろうか。

心配性な所がある母は…優しいが躰には厳しい父は…楽観的で、でも悲しいことがあると私の身体に顔を埋めてくる姉は……………きつと皆、心配している。

こんなに悲しく切なくなっても、私はその気持ちを表すために吠えることもできない。

だが家族のことを思えば思うほど、私の中に言い様の無い気持ちが溢れてきて吠える真似事でもすれば少しは気が晴れるのではないか
と思い、実行することにした。

「わおん…おおおおん」

少し試してみると、何だか出来そうな気がした。

「オオオオオオオン……………ワオオオオオオオオオン……………」

薄暗い建物の中で、私の声が木霊する。

少し気を良くした私は、外に出て月を見上げる。

—————
ワオオオオオオオオオオオオ—————

私はココにいる。心配しなくても元気になっている。
会いたい。悲しい。

思いを込めた遠吠えは森の中に響き渡り……消えた。
半分に欠けた月を見つめながら、私はゆっくりと眠りに落ちていっ
た。

思考（後書き）

ストックが尽きましたので、更新が不定期になる可能性があります。
ご意見、ご感想お待ちしております。

side子供

村の入り口につく頃には日はほとんど落ちていて、そこに大人たちが集まっていた。

それに気付いた子供たちは思わず足を止める。

すると、大人たちの中から一人の女性が子供たちに気付走りよってきた。

「ユーナ!!」

「…おかあさん…えつと……」

「こんなに暗くなるまで何してたの!お母さんは心配で心配で…もう少ししても帰ってこなかったら皆で探しにいくと思ったのよ!」

女性は一番小さな女の子をぎゅうつと抱きしめポロポロと涙をこぼす。

「ごめんね。あのね、かみさまのところにおいのりにいつてたの。」

「囃様のところに?」

「うん。おにいちちゃんをなおしてください!」って

一生懸命話すユーナを母親はさらにきつくだきしめた。

「囃様の所だと?」

ユーナ達の話聞いて、一人の男が近づいてきた。

緋色の髪を短く刈りあげ、その体は鍛え抜かれている。

周囲の男たちと違って少し背が低いが、そんなことを感じさせないくらい堂々とした雰囲気をもっていた。

少女は見すえられて怯えたのか、母親の陰に隠れてしまった。
そんな少女に目尻を少し緩ませ微笑みかけると、村長は一番大きな男の子に話しかけた。

「どういうことだ？ライ。」

声をかけられた男の子は一瞬うつむくと、意を決したように顔を上げた。

「疫病を治してもらいにカミサマのところにお祈りにいったんだ。そしたら、ちょっと…いろいろあって…こんな時間になっちゃった。

心配かけてごめんなさい。詳しくは家に帰ってからでもいいかな？みんな疲れてるし…」

「ふむ…ここではできない話か。分かった。」

「ごめんなさい…」

「無事ならいい。」

おい！皆！！子供達も無事に帰ってきたことだし、今日はもう遅い。話は私がライから聞いておくから皆は解散して家に帰ってくれ！！」

村長の言葉に、村人たちは訝しげにしながらも家に帰って行った。
他の子供達も親元に戻り、怒られながら帰ってゆく。
ライも村長である父親に連れられ、家に向かった。

「で、どういうことかしっかり説明してもらおうか？」

開口一番そう言った父親の瞳は威圧するような言葉とは裏腹に楽し気だった。

彼は今では村長として皆を取りまとめるため堂々として厳しい様子をみせているが、本性はいたずら好きの人の嫌がることを嫌われない程度にして楽しむ性格のゆがんだ人物である…とライは思っている。

そして今は子供たちが何をしでかしたのか、気になって仕方がないんだろうなあ…でもそれを全面的に出すのは何か悔しいから厳しいフリをしてるんだろうなあ…と感じていた。まさにその通りである。

「ほら、早く話せ。」

「いいけど…怒らない？」

「ま、それは場合によるな。まあ俺の予想した通りなら遅くなったこと以外に怒る必要はないけどな。」

「だから早く話せ。」

「うん、実は…」

ライの話は簡単だったが長かった。

疫病が蔓延し、子供達も不安な日々を送っていた。そして、ユーナの父親が疫病に感染した。

どんな薬も効かないのは今までで十分わかっていて。でも悲しい顔をしたユーナの気持ちを少しでも軽くするため、ライ達はカミサマの祠にいつてお願いをすることにした。

ただお願いするだけではダメだと聞いていたので、めいめい自分の宝物（一番きれいなリボンやきれいな石やら蛇の抜け殻やら色々だ）をもって祠に行くと、一生懸命お願いをした。

いつまでそうしていただろうか。辺りがピカツと光ったと思ったら祠の中でこそごと何かが動いている気配がしたので中をのぞいた

らカミサマがこっちを見ていたのでそうつと近づくと、カミサマはこちらに興味がなかったようで寝てしまった。だから起きたらお願いしよう！と祠の中で座って待っていたらいつの間にか自分たちも寝てしまった。

そこまで話して、ライは乾いた喉を潤すために水を一口飲んだ。そのまま父親をうかがうと続きを話せ。と無言で催促されたので、続きけることにした。

「それで、寝てたらカミサマに舐めて起こされて、ユーナが泣きそうになって大変だったんだけどなんとかだめてカミサマに助けてください！ってお願いしたんだ。そしたらなんだか困った顔をしてとりあえずなんでこんなことになったのか説明できる大人を連れてきなさいって。それと、今日はもう遅いから帰って明日きなさいって言われた。」

「……………」

「あの…父さん？」

「よし、分かった。俺はちょっと巫女と話してくるからお前は寝てろ。」

「え？でも…」

「後は父さんが何とかする。噛様にも明日、ちゃんと話しに行ってくる。」

お前たちがやったことが良いか悪いかは今後、どうなるかによるから何とも言えないからとりあえず今は保留な。」

「…うん…」

「じゃ、俺は言ってくるから！寝とくんだぞ！！」

父親はライの頭をぐしゃぐしゃとかき回すと、巫女の家に行ってしまった。

一人取り残されたライはああなった父親は一通り筋が通らないと説

明してくれないと分かっているのに諦めて寝る準備をしたのだった。

s i d e 子供（後書き）

ちよつと間があいてしまいました。帰った子供たちの話です。
ここから話が進む。。。ハズ？

s i d e 子供―2 (前書き)

少し長めですがほぼ、会話文です。

side子供―2

巫女の家にとどり着いた村長はノックもせず室内に入った。

「邪魔するぜー。」

「ラウジ！いきなりなんなの？」

「ライから話を聞いてな。相談しにきた。
ソフィアじゃなく巫女にな。」

軽く言われた言葉にソフィアは居住まいを正す。

昔からの仲間たちの前ではいつもおちゃらけているラウジがこう言うときには何か深刻な問題があるからだ。

「何があつたのですか？」

「噛様に関することだ。あいつらどうやったかは分からんが噛様を
召喚したらしい。」

「…はえええ？！」

ソフィアはラウジの台詞にすっとんきょうな声をあげると固まった。

「だよなー。びっくりするよなー。俺も顔には出さないようにした
けどびびったもんなー。」

分かる分かると頷くラウジ。

「……………つて、ちょっとまって！それは本当なの！？」

「多分本当だぜ？いきなり祠が光ったら見たこともない獣がいたら
しいし。」

体毛は銀色に輝き鋭い牙と、三本の尾を持った狼のような動物な

んてこの辺りには居ないしな。人語も話してたらしいし噛様で間違いないだろうよ。」

「それが本当なら…喜ばしいことかもしれないけれど、問題があるわよ?」

「ああ、だからお前に話をしにきたんだ。噛様の巫女であるお前は村長である俺よりも噛様について詳しいだろう。」

「そうね…貴方は村長だから噛様の力が二つあることは知っているのよね?」

「ああ。でも詳しいことは知らないぜ。」

「では、その力についてと噛様とは何なのかについて話をしましょうか。」

「噛様とは銀色に輝く体毛と何もかもを噛み砕く鋭い牙と全てのものを癒す先が二つに別れた長い舌と三本の尾を持ったもので、大抵は狼のような外見をもっていることが多いわ。」

でも今までの噛様の中には狼とは違うものの形をとられた方もいらっしやったと記録には残ってる。そして人語を操るとができる。ここまでは村の人たちも知っていることね。おとぎ話にもなっているし。」

そしてここからは巫女にだけ伝えられているのだけれど、噛様はこの世界の方ではないわ。おとぎ話のように神の世界から来られた訳でもない。

噛様はね、異世界から来られるのよ。」

「異世界？」

「そう。嚙様は別の世界で生きていた普通の動物が人がこちらの世界の人間によって召喚されてこちらの世界にくるの。大抵は動物が多いよね。そしてこちらの世界にくると力を与えられる。それが嚙様。」

「ちよつとまで！それじゃあ嚙様ってのは俺らと何も変わらないんじゃないか？」

ラウジの疑問にソフィアは続きを話すことで答える。

「そうでもないわ。さっき話した通り嚙様には何もかもを噛み砕く牙と全てのものを癒す舌を持っている。これが嚙様が持っているという二つの力の事よ。」

ただし、これには大きな問題があつて嚙様たちはこの力のどちらかしか操れない。牙を持つている形で現れたからといってその牙を使いこなせられる訳ではないってことね。それは舌も同じ。たまに二つとも使える方も居みたいだけど片方に特化していてもう片方は微妙だつたみたいよ。そして使えるようになるまで時間がかかることが多い。

力がどちらに傾いているかは会えばすぐに分かるから問題は無いわ。

ライの話から今回の嚙様は理性的な方みたいだし、話し合い自体は比較的穏やかに行えると思う。

ただね、これだけは肝に命じておいて欲しいのだけど、もし、嚙様が私たちに力を貸して下さらなくても嚙様を害してはいけないわさつきも言った通り嚙様は異世界の方。こちらの都合で呼び出した上に意に沿わないからという理由で嚙様に攻撃を行うと、今後、何があつても嚙様を召喚できなくなってしまうわ。そして、私たちは嚙様を失う。記憶からも消されるらしいわよ。」

話を終えて、ソフィアはゆっくりとため息をついた。

「とにかく、今回召喚された噛様が癒しの力を持っていることを祈るばかりね。噛様の癒しの力はどんな病気や怪我もなおしてしまわれるらしいから。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」 ラウジ？

眉をしかめて黙りこんでしまったラウジにソフィアはそつと声をかける。

「…………… z z z ………………」

「！？ラウジつつつ！？」

長い話に飽きたのかラウジは居眠りをしていた。

一瞬でキレたソフィアが殴り倒して起こそうとすると遠くから「オオオオオオン」ともの悲しい獣の鳴き声が響いてきてソフィアは振り上げた手を下ろしてしまった。

森の獣にあのような遠吠えをするものはいない。

ならば今は噛様だろう。

家族と離され知らない身体を与えられ、どれほど悲しいだろうか。遠吠えを聞きながら、ソフィアは何があっても噛様の力になろう…と心に決めた。

余談だが、その後やはり殴って起こされたラウジは正座で二時間説

教を受けることになった。

s i d e 子供―2 (後書き)

噛様の設定をソフィアに説明させてみました。会話文での説明って難しい……

何かできたよ。

日の光が眩しくて私は目を覚ました。

昨夜はあのまま眠ってしまっていたようだ。

場所は昨日と同じ。身体も検分してみたが、昨日と変わらないようだ。

もう一度寝ようかとも思ったが目がさえてしまった為に眠れそうにはないし、さてどうするか。と思ったところで『ぐるるる』と腹の虫が鳴った。そういえば昨日こちらに来てから水しか飲んでいない。

何か食べるものでも探しにいかうかと立ち上がったところで何だか変な感じがした。

痒いところに手が届かないというか、なんだかもぞぞするとか、どう言ったら良いのか分からないので『変な感じ』としか言いようがない。

何やら集中すれば良いような気がしたのでそのむずむずに意識を向けてみると、目の前にぼんやりと人影が見えた。

ビクリして意識を外すと見えなくなる。

また意識を向けるとやはりぼんやりとだが人影が見えた。そのまま集中するとだんだん人影がハッキリしてくる。

男と…昨日の子供……と、何だかやたらとキラッキラな女の、三人だ。

大人を連れた子供が居るということは説明してきたのだろうが、あの女は何故、あんなにキラッキラなのだろうか。他の二人は何となく顔形が見えるのに全く見るできない。

多分こちらに向かっているようだし、直接見る分には大丈夫だろうと何となく思っただけで意識を閉じる。

それにしても、腹が減った。

人が来るなら食料を探しに行くこともできない。

こちらに向かっているのだろう人間達が何が持ってきてくれていることを願うばかりだ……

私はくるくると鳴る腹を宥めながら待っている。

待ちきれなくて建物の外に居るのは許してほしい。

しかし昨日は暗かったからよく見えなかったが、この建物、内装は木で出来ているのに外側は石造りなんだな。しかも柱の一本一本まで細かい装飾が施されている。多分ここは人間にとって大切な所なのだと思う。

そんなことをつらつらと考えていると、目の前の茂みがガサツとなった。

ようやく人間がたどりついたようだ。

さあ、ご飯をくれ。

何かできたよ。(後書き)

今回短めです。

ちよつと長くなりそうだったのでここで一旦切ります。

まあ予定は未定ですけどねっ！

出会い

やって来たのは予想通り男と女と子供の三人だった。直接見た女は先程とは違って光輝いておらず少しホツとする。

「カミサマ！約束通り大人を連れてきました！」

子供が走ってきて報告をしてくれた。

うむ。良い子だ。

褒めるつもりで舌を出して舐めようとしたら怯えた顔をしたので止めて頷くだけにとどめておいた。
改めて呆然としているに向き直るととりあえず挨拶をする。

「はじめまして。」

「……はじめまして。貴方が嚙様か？」

男の方からだけ返事がきた。しかも疑問つきで。女の方は何故か顔を赤くしてこちらを凝視している。ちよつと怖い。

そうそう、質問に答えるのを忘れていた。私が“カミサマ”とやらかどうかだったか……

「知らないな。」

「知らない？自分のことだろう？」

「気づいたらここにいて子供たちが騒いでいた。私は何故、自分がここに居るのか理解できていない。」

そもそも私はその子供にどうしてこんなことになっているのか説明できる人間を連れてきなさい。と言ったはずだ。

お前はそれを聞いて来たのではないのか？」

私の言葉に男は黙りこむ。

ふと前足を触られた感触がしたので目をやると、顔を真っ赤にした女が私の毛をすいていた。

「ふさふさ……キレイ……」

………え？なんだ？

思わずぼんやりとみていると女はうつとりとした表情で私の毛並みに顔をうずめた。

「柔らかくてさらさらで、でも暖かくてとても気持ちいい…毛足が長いからふつとできるし。ああなんて素晴らしいのかしら！」

………何だろうこの女は。

男に助けを求めようとするが、さっと目をそらされた。

では、子供は…と思うと先程までの場所にはおらず、少し離れた木立の中からこちらを見ていた。助けてくれる気はなさそうだ。

「…うオンっ」

なで回されるのに辟易した私は少し威嚇を込めて小さく吠える。すると女はハッと顔を起こすと、呆れを通り越してこちらが困っているのを助けもせずニヤニヤしている男、木立の中からこちらを伺っている子供、そして最後に私を見て慌てて身体を離すと（かなり名残惜しそうだ）こちらに向き直ると深々と頭を下げた。

「お見苦しい所をお見せして申し訳ありませんでした。

私は巫女のソフィアと申します。

このような事態になった説明は私からさせていただきますのでよろしくお願いいたします。」

「わ…分かった。よろしく頼む。」

顔を上げた女は先程までの様子が嘘のように凜としている。

あまりのギャップに私が少し引いたとしてもそれは仕方のないことだろう。

「それでは早速説明させていただきたいのですが、よろしいですか？」

「ああ…いや、その前に何か食べ物を持っていないか？昨日から何も食べていないので腹が減った。」

「食べ物…ですか？私は持っていないのですが…ラウジは？」

「一応、干し肉なら持っているが…これでもかまわないでしょうか？」

そう言つて男が持っていた袋から取り出したのは拳程の肉の塊だった。

すでに限界だった私は答えるのも面倒で差し出された干し肉を無言で奪い取ると前足で押さえつけ端からガリガリと削り取っては飲み込んでいった。正直一口で食べきれたのだがそれではすぐになくなってしまうのでこんな面倒な食べ方をしたのだ。それでも食べきるのにさほど時間はかからなかった。

「ご馳走さまでした。」

お腹一杯にはほど遠いが、とりあえず空腹では無くなった。

それでも名残惜しくて押さえていた前足を舐めていると目の前に水の入った椀が置かれた。顔をあげると女…ソフィアがニコニコしながら「お飲みください」と言うので遠慮なく飲むことにする。

「ありがとう。少し落ち着いた。」

「いいえ。私たちも嚙様がお腹を空かせていらっしやることも考えていなくて申し訳ありませんでした。」

「落ち着かれたようですしお話をさせていただいてもよろしいですか？」

「ああ。頼む。」

そうしてソフィアが語ったのは昨夜ラウジに語ったのと同じ。

嚙様がこの世界に召喚されたこと。この世界に来たときに姿が変わってしまうこと。そして嚙様には二種類の力があってどちらかしか操れないということ。

そして、嚙様として召喚されたものが元の世界に帰れるかどうかは分からないということ。

「分からない…何故、分からないのだ？」

「嚙様についての伝承は多種多様にありますが、なぜか最後があやふやなのです。巫女の口伝でさえ伝えられてはおりません。私も調べてみたことがありますが何もわかりませんでした。」

「そうか……帰れないのか………」

「申し訳ありません。」

「いや、貴女が謝ることはない。」

そう言いながらも私の心は家族を思っ張裂けそうだった。

帰れない。

もう、会えない。

悲しくて悲しくて前足の間に顔を埋めてしまう。ついでに尻尾も丸めて丸くなる。

三人がびっくりしたように息を飲むのが分かったが、自分の感情に翻弄されていた私は他人のことなど気にしている余裕は無かったので放置しておいた。

どのくらいそのままでいたのだろう。

気がつけば周りに人影はなく、建物の外にはかごに入った果物と干し肉が置いてあった。

持っていた分は食べてしまったはずだから、これは新しく持つてきてくれたものだろう。

どれだけ悲しくとも腹は減る。

ぐう。ど主張する腹に負けて私は果物と干し肉を食べた。それがとても美味しくて、一心不乱に食べ続ける。

全て食べ終わると二日ぶりの満腹感が襲ってき、ついでに睡魔までやってきた。

うつらうつらしながら、

最後まで話を聞いてなかったのは悪かったな。明日はちゃんと聞こう。助けてほしいと言われた内容もきいていないし……

そこまで思ったところで私は意識を手放して睡魔に身を委ねた

出会い（後書き）

ソフィアさんのもふもふリポートをもっと書きたかったんですが長くなりすぎるので短くしました。
機会があれば書きたいです。

二人の話

「で、どうするんだ？」

「どうって？」

ラウジの言葉にソフィアは首をかしげる。

「噛様のことだ。あのまま置いてきてしまったし。一応、食料は置いてきたが……」

「そうね…あそこにいてもどうしようもなかったしね……」

ふう…と小さくため息をついたソフィアの脳裏には別れた時の噛様の姿が写っていた。

悲しみを全身で現し何もかもを拒絶するように丸まってしまった噛様に声をかけることもできず、だからといって放置することもできず、そこにいた三人にできたのは一旦村に帰り気がついた噛様が食べれるように食料を置いておくことだけだった。

「明日、もう一度行ってみましょう。どうせ食料も持っていかなければならないのだし。」

「そうだな。それはそうと、今代の噛様の力はどちらだったんだ？」

「……………え？分からないわよ？」

きよんとするソフィアに驚愕するラウジ。

「何でだよ！お前、あんなけなで回してたじゃねえか！調べるのは簡単だったってだから噛様の助けて欲しそうな視線も無視ってたのに……………」

「えつと…ごめんなさい？」

あれは単純に噛様の毛並みがあまりにもキレイでふわふわしていたから欲望が押さえきれなくて……ちょっとだけと思っただけで触ってみたら予想以上にふかふかのさらさらで毛玉なんて一個もないのよ！？撫でるしかないわよあれは！！」

感触を思い出したのか頬を染め蕩けるような表情で噛様の毛並みがどれほど素晴らしいのか力説するソフィア。

「わーかった！分かったから落ち着け！！」

「そう、あれこそが世界一の毛並みのよ！！……ハッ！？私は何を……？」

「……覚えてねえのかよ……」

「ええと…覚えてるわ…よ？噛様の素晴らしさについて語っていたのよね？」

「もういいから……力の調べ方について話してくれ。」

げんなりした表情のラウジはそういやこいつ異常に毛のある動物が好きだったな…と今更ながらに思い出しつつもう二度とソフィアに動物の毛並みについては話をふらないでおこうと心に誓う。

「力の調べ方はね、とても簡単なの。」

「それは昨日も聞いた。具体的にはなにをするんだ？」

「甘噛みしてもらうの。」

「甘…噛み？それは何だ？」

「牙のある動物の一部はね生まれた子供が小さいときに口でくわえて移動させるの。その鋭い牙で子供を傷付けることなくね。それが甘噛み。と呼ばれるものよ。」

癒しの力を持つ噛み様は必ずこれを行うことができる。たとえ召喚されたその日であってもね。だから甘噛みして下さい。って頼ん

で悩むことなく出来たら癒しの力を持っていて、できなかったり悩んだりした場合は攻撃の力を持っているということになるわ。」

「それだけか？」

「そうよ。噛様が何で『噛様』って書くと思ってるの？噛むことで力が発揮されるからよ。癒しの力を使うときに噛んで傷付けてしまったら意味がないでしょう。」

「それもそうだな……」

「とにかく、その確認は明日することにしましょう。それと子供たちから噛様が現れたってことは村に広まってしまっているから貴方は皆に過度な期待を持たないように話をしておいてね。あと、勝手に祠に行かないように。って。」

「了解。じゃあ俺は男どもを集めてむさ苦しい会議してくるわ。」

面倒臭そうな声と共に出ていくラウジを見送って、ソフィアはため息をついた。

明日になれば噛様は落ち着いてくれるだろうか？

癒しの力を持っていたとして、それがすぐに使えるようにはならないことをソフィアは知っている。多分、今の時点で病に侵されている人々が助かる可能性は低いだろう。

だからといって諦めることはできない。

ソフィアにできることは巫女として噛様を導くことだけなのだから

……

二人の話（後書き）

ソフィアは天然入ってるようです。

ちから

翌日。

前日と同じように日の光を浴びて目を覚ました私は水を飲みながら空腹を堪えていた。昨日、人間たちが持つてきてくれていた食べ物には食べきってしまったためだ。

少し残しておけば良かったと公開したが後の祭り、そもそも昨日は丸二日近く何も食べていなかったため限界だったのだ。今は空腹ではあるが昨日のように切羽詰まった感じではないので耐えるのも比較的楽である。運が良ければ昨日の人間たちが何か持つてきてくれるだろう。というのもある。

ちなみに帰れないことに関しては寝て起きたら

“それならそれで仕方がないな”

と思うようになっていた。

家族に会えないのは悲しいし寂しいが、だからといってうじうじ悩んでいても何も変わるわけではない。ならばこの召喚されたとかいう世界で生きていくことにしよう。

元々、悩むことに慣れてなどいない私はそう結論づけたのだった。

だらだらしているうちに日は完全に昇り、暖かな光が辺り一面に降り注いでいる。

私は昨日の良く分からない力を試すべく、広場に立つて森を睨み付けた。

……何も感じない……いや、何だかもやつとした感覚はあるのだが弱いし感じては消えていくので特定が難しい。昨日はこっちに

集中すればいい。となぜか分かっていたので問題なかったのが……

と、突然もやつ。がむずむずに変わった。しかも続いている。どうやら小道の先から感じるようなので集中してみると昨日の男と眩しい発光体（多分女）が見えた。

袋のような物を持つているようなのできつと食べ物を持ってきてくれたのだろーと思い、その場に寝そべって待つことにした。

待つこと数分。

広場にやってきた二人と挨拶を交わしてから食べ物を買って、食べ終わると昨日の話の続きである。

「助けて欲しい。」

子供たちはそう言っていたが、私に助けることなど出来るのだろうか？昨日の話では力は一つしか持てないと言っていただろう？」

「はい。そこで嚙様をお願いします。」

「願い？」と首をかしげるとソフィアはとても良い笑顔で言った。

「このラウジを甘噛してください。」

「ううん！？俺！？」

どうやら寝耳に水だったらしいラウジがやたら驚いているがソフィアはそれを見無視して「さあどうぞ」と促してくる。

私はそれくらいならとおずおずと出されたラウジの腕を牙で傷付かないようにそつとくわえた。

「…やった!!」

固唾を飲んで私がくわえるのを見つめていた二人は私が腕を離すと喝采を上げた。

「これで…村が救われる……!!」

「囃様囃様。これだ囃様は癒しの力を持っていることがわかりました。あとは力の使い方を覚えるだけです。簡単です。よろしくお願いしますね!!」

舞い上がって話す二人の話をまとめると、村は疫病が広がりつつあって、私ならばそれを癒す事ができるらしい。

困ってるものを助けることに異論は無いが、本当にそんな力があるのだろうか？

私の葛藤などお構い無しにソフィアは食べ物が入っていた袋を開けると小さなナイフを取りだし、止める間もなくラウジの指先に小さな傷をつけた。

「いってえ！お前何すんだよ！」

「ラウジは黙ってて！」

さあ囃様。ラウジの指をくわえて舌で傷に触れてください。傷が治るように優しく舐めるといいらしいですよ。」

にこやかなソフィアには拒否することを許さない雰囲気のでている。私はゆっくりと差し出された指先をくわえ『治れ〜治れ〜』と思いながら舌で傷口に浮かんだ血液を舐め取った。

鉄臭い味に思わず口を離すと、ラウジが自分の指先をマジマジと見ている。

失敗したかと思って内心で焦っていると、

「治ってる」

という呟きが聞こえた。どうやら成功したようでホッとする。

このあと日がくれるまで力の使い方の練習と講義が行われ、二人は夕食用の食べ物を置いていくと明日もまた来ると言って去っていった。

練習台にされ続けたラウジの背中からは濃い哀愁が漂っており、ご機嫌のソフィアと比べるととても可哀想だったので、視線で『頑張れ』と応援しておいた。

声には出さなかった。とばかりを受けたくはなかったので。

慣れない身体での甘噛みの連続は思った以上に緊張していたらしい。祠の中の定位置に寝そべると、あっという間に眠ってしまった。

ちから（後書き）

噛様の力決定。

今週は予定外の仕事が増えてしまい更新が遅くなりました。すみません。

病（前書き）

疫病についての説明です。病については現実にある病気を改変して使用してます。

かなり変更は加えています。元の病気を知っているかたには分かってしまうと思います。すみません。

病

村には疫病が蔓延していた。

初めに死んだのは老人だった。

突然の発熱。数日続いたそれが下がった次の日の朝、老人は立つことが出来なくなっていた。次の日は目が見えなくなり、その次の日は腕が上がらなくなり、次の日には口が聞けなくなり、最後は心臓が止まった。

死に方が不自然ではあったが、老人が高齢だったこともあり、変な病にかかったのだらうということで皆、納得していた。

念のため遺体は火葬し、発病してから老人に触れた人たちは念入りに手洗いを行っていた。

だが数日後。

若い男が発熱した。そして下がった次の日の朝起きると腕が上がらなくなっていた。

彼は猟師だったので自分の身体にはとても詳しかった。発熱前に大きな怪我をしたこともなければ変な虫に刺された覚えもない。

このままでは生活できないので急いで薬師に相談しにいったが、分からないと言われてしまった。

次の日、彼の口は動かなくなっていた。半狂乱で暴れる彼をむ村の男たちが取り押さえ、無理矢理寝かしつけた。

そして次の日、彼の心臓は止まっていた。

この時点で村人たちは何かがおかしいと気付いた。

そして彼が死ぬ数日前に老人が似たような病で死んだことも思い出した。

だが彼と老人に接点はなかった。何より老人が病に侵されている時、

彼は狩りに行っており村にいなかったのだ。

数日後には若い娘が発病した。彼女は嫁入り直前だった。

次の日には中年の女が。

ゆつくりと、だが確実に病は広がっていった。

この病は突然の発熱から始まる。それは3日〜5日程で下がるが、下がった次の日の朝に身体の一部が動かなくなっている。

動かなくなる場所は人それぞれで指一本の場合もあれば両足など様々だ。ただし、最後は必ず心臓が止まる。

感染経路は不明。発病した人々の共通点もない。

ただ良いこともあった。看病の陰か最短でも3日は下がらなかった熱が2日で下がった者がいた。その者は次の日に身体が動かないということがなかったのだ。

ただ、その者も何日が後には発症したが、その経過は緩やかで心臓が止まるまでに一月を要した。

その時点で他にも発熱がすぐに下がった者が現れており、彼らも経過は緩やかだったことから、熱が早く下がれば心臓が止まるまでも長くなることがわかった。

ただこれも根本的な解決ではなく死を引き伸ばしているだけではあったが……

そんな手詰まりの中、現れたのが

“噛様”

だ。

しかも“癒しの力”をもった“噛様”だという。

嫌がおうにも膨れ上がる皆の期待を抑えながらラウジは頭を抱えていた。

今は特に切羽詰まって発症が進んでいるものはいないから力の使い方を覚えるまでに多少の時間がかかったところで問題はない。

問題はその後だ。

ラウジたちの村があるユリティシア王国では嚙様信仰は廃れている。その代わりに太陽神が神様として大々的に信仰されていた。

廃れているとはいっても田舎の方では神様と嚙様は同じようにして奉られているので弾圧などは全くない。ただ、嚙様が召喚されたということが国にバレるとややこしいことになるのは確かだった。

税を納めている関係で領主には病のことを話してあるのでイキナリ全員回復しました。という絶対理由を聞かれる。傾向と対策も絶対に聞かれる。

今の領主は穏やかな性格なので何とか言いくるめて時間を稼ぐしかないだろう。

どれだけ考えても良案が出てこなかったのでラウジはこの問題を一旦棚上げすることにした。

村人たちには箝口令を敷いているし、病のせいで商人たちも村に来ることはない。

とにかく嚙様に病気を治してもらわないとどうしようもないしな……ふう。とため息を吐くと、ラウジは書斎の火を落として寝室に向かった。

病（後書き）

皮肉屋のはずのラウジが何か真面目なおっちゃんになっている不思議。

あれ？初期設定どこいった？？

はじまり？

あれから一週間が経った。

初めて力を使った次の日から勉強会という名の拷問が始まった。

うん、あれは拷問だ。

おかげで力の使い方は大分上達した。

ついでに、身体の大きさも変えられるようになったので最近はずっと大型犬くらいの大きさをしている。

あと、もぞもぞの正体がわかった。『結界』という力で三本の尾の1つに宿っているらしい。無意識に展開しているらしいのだが、意識して使うと精度が上がるそうなので昼間は出来るだけ使うようにしている。使い勝手良さそうだしな。

そんなこんなで、今日は初めて村に行きます。ソフィアとラウジの二人とは森の出口で待ち合わせですよ。祠まで来てもらってたら時間がかって仕方ないからな！

正直本当に治せるかなんて全くわからないけども頑張ろうとは思っている。

はじまり？（後書き）

今週はやたらと忙しくて更新遅い上にこんなけしか書けてません。次でやっと村に行きます。気付いたらそれだけで13話も使ったよ。進み遅い……

お気に入り登録ありがとうございます！

週一くらいで更新していきたいと思ってます！

治療

ラウジとソフィアに先導されて村に入る。

入る前にこつそり結界を展開したので村人たちが数人を除いて皆、広場らしき所に集まっているのは確認済みである。

集まってない人達が病人なのだろう。

「元の大きさに戻って下さいませんか？」

これは元々予定していたことで、囃様は大きいと皆思っているので大型犬サイズだと疑われる可能性がある。なので皆の前に出るときには元の大きさで出ることになっていたのだ。

この一週間で感じる事が出来るようになった魔力を身体に流すと一瞬で元に戻る。

やはり元に戻ると解放感がある。身震いをすると、ソフィアが恍惚とした表情でこちらを見ていた。

えっと……………これはヤバイ……………

一瞬、本気で逃げるか考えていたらラウジがソフィアを叩いて正気に戻してくれた。

助かった……………

「ここを曲がると広場だ。

打ち合わせ通りまず俺が皆に貴方を紹介する。

その後、一番症状が軽い者の家に行って力を使ってもらう。成功したらそのまま家に行く。

それでいいな？」

打ち合わせ通りという事だな。

了解。と伝え、そのまま広場に突入する。

広場にはやはり村人全員が集まっていた。

大人たちに隠れて見えにくい隅の方には祠に来ていた子供がいたので挨拶のつもりで尻尾を振っておく。

……気付かれなかったみたいだけでも。

村の人たちは私を遠巻きに見つめ、ヒソヒソと話をしていた。

「あれが…囃様……？」

「見て！尻尾が三本ある…！」

「舌は…？……見えないな」

「……おとぎ話の通りね……」

聞こえない様に話してるつもりだろうが丸聞こえなので反応しないようにするのに苦労した。

パンっパンっ！！

と大きな音がして皆が静かになった。ラウジが手を打ち鳴らしたようだ。

「静かに！」

皆、もう知ってると思うが囃様が降臨された！この一週間、巫女と私の二人で囃様と話した結果、囃様に癒しの力を使って頂けることになった！！

ただ！前もって話していた通り、囃様はこちらにこられて日が浅いため、すぐには治らないかもしれない！！

治らなくても囃様を恨んだりしないと約束できるか！？

「……できる！！」

揃った返事にラウジは満足そうに頷くと、私を一軒の家に誘導した。

村人の一人が慌ててこちらに来ようとするがソフィアにやんわりと阻止されている。

元の大きさでは家には入れないので身体を縮めてから家に入り通された部屋には粗末なベッドに男が一人こちらを見ている。

「あんたが…嚙様か？」

「ああ。」

「……そうか……」

それだけ言うと男は瞳を閉じて黙ってしまった。

ラウジを見ると、「やってくれ。」と言われたので今から貴方をくわえるので動かないで欲しいと伝ええると、小さな頷きが返ってきた。動かなくなったのは足だと聞いていたので、牙を立てないように気を付けながらくわえると、治る様にと念じながら舌尖から魔力をゆつくりと流し込んでいく。

そのまま数分。

彼の身体に私の魔力が循環しているのを確認して、私は身体を離れた。

「どうだ…？動くか？」

静かに問いかけると彼は瞳を開き、足を……動かした。

長い間使っていなかった為に動きにくそうではあったが、確かに足は動いた。

嬉しくなつて彼を見ると、呆然として己の足を見つめている。

そして……

「治ったあああああ！！！！」

と、涙を流しながら絶叫した。

その後は病気の者たちの家を一軒一軒訪ね、癒していった。
一人治すたびに村が活気づいてゆく。
全員治ったのは夕方だった。

ラウジと二人で広場に戻ると、そこは宴会場と化していた。
様々な形のそこの家から持ち出してきたのだろう机には所狭しと
料理が並べられ、男たちは祝杯を、女たちは次々と手料理を作り、
空になった皿を下げ、新しい料理を並べる。子供たちは歌いながら
踊っている。

「やってるな…… 噛様もどうぞ」

私は正直、魔力を沢山使って疲れていたのので祠に帰って休みたかったのだがそれが許されそうな雰囲気ではない。

「噛様……！ありがとうございます……！」

「本当にありがとうございます！」

「噛様！遊ばー！」

「おどろー！」

お礼と供に次々と目の前に置かれる料理を食べていると子供たちが
近寄ってきた。

断りきれずに子供たちと一緒にになって踊りの輪に入る。

くるくる回っていると楽しくなってきた。何時までも踊っていたくな

ってくる。

くるくる

くるくる

ひらりっ

くるくる

子供たちが……大人たちが……皆、楽しそうに笑っている。
一旦休憩しようと踊りの輪から出ると、横にいた男に差し出された
飲み物を一気に飲み干した。

……あれ??世界がま……わ……???

名前

あれから1ヶ月が経った。

私は今も祠に帰って住んでいる。

私が病を癒したあと、疫病はピタリと止んだ。村人たちは「嚙様のお陰です！」ととても喜んでいたが私は大したことをしたつもりはないので崇められるのに辟易し、祠に避難したらそのまま戻るのが面倒になったのである。

一人きりだと寂しかっただろうが、毎日子供たちが食料を持ってきて、ついでに遊んでいくしソフィアやラウジも二日に一度は顔を出してくれるのでそれほど寂しいとは思わないですんでいる。

で、今も私の前では子供たちがきゃーきゃー言いながら遊んでいる。ここに来るようになったその日に子供たちから自己紹介をもらった。

一番大きく、大人を連れてきたのがライ。ラウジの息子らしい。確かに紅い髪の色や目鼻立ちが似通っている。

女の子の中で一番大きいのがリサで、金髪で緑の目をしたとても元気のいい子だ。時々元気が良すぎて……色々……うん、色々やらかしてくれる。

その次がドーン。物静かだが怒ると怖い。彼が怒ると地面が少し陥没したりするので驚いた。後でソフィアに聞いたのだがドーンは地の属性で精霊に好かれているせいでそんなことが起こるらしい。

精霊って何だろうか？と思ったがソフィアに聞いたら恐怖のお勉強タイムが発生しそうだったので分かったフリをしておいた。

次がサイラス。リサの弟で姉に似ずっかりしている。姉がしでかしたことの後始末をしているうちにこうなった。とは本人の談である。

一番小さいのがリサ。内気で人見知りの気があるが優しい子である。

そうそう、私にも名前がついた。

“ダン”

という名前である。

囃様と呼ばれるのがこそばゆかったので名前で呼んで欲しいと頼んだら子供たちがつけてくれた。結構気に入っている。

子供たちと遊び、勉強しながら私は少しずつこちらの世界で生きるための手段を手に入れてゆく。

何かに急ぎ立てられるように……

それが何なのか分からなかった事を、後日、私はこうかいすることになる。

名前（後書き）

ほぼ、キャラ紹介になってしまいました。
とりあえずここで一章終わり。な感じです。

このあとは閑話を数話入れてから本編にとつづく予定。

ご意見、感想などお待ちしてます。誤字脱字のご指摘してくださいと喜びます！！

彼女の気持ち

「どこにいったんちやっただろう……」

彼女はセミロングの髪の毛を鬱陶し気にかきあげながら辺りを見渡した。

ある日の夕方。何時ものように散歩に行こうとおもったら、そこに彼は居なかった。

リビングの端っこにある古毛布とよれよれになったクッションを重ねたそこから彼が動くことは歳を重ねることに少なくなってきた。

だから彼が居なかったことにビックリして、台所にいた母親に彼の行方を聞いたけれど知らないとのことだった。
玄関には鍵がかかっていたし、クッションにはほんの直前まで彼が居ただろう温もりを残していた。

それからは大変だった。

近所中に聞いて回って、迷い犬の届けを出した。
彼が居なくなつて泣き叫ぶ弟を両親と必死で慰めた。

逃げ出した様子は全くないのになぜいないの？

お腹空かせてない？

怖くない？

泣いてない？

初めの数日は心配で心配で夜も眠れなかった。

1ヶ月経った今、一応普段の生活には戻っている。

お母さんとお父さんはもう彼は戻ってこないだろう。って言うてる。

随分と弱ってきていたから自分が死ぬのが分かって何処かにいったんじゃないかって。

私もそうかもしれない。と思う。

だけど、予定がない日はついつい彼を探してしまう。

もし…もし、本当に死んでしまったのだとしても。

その姿を私たちに見せなくなかったのだとしても。

ごめん、私は貴方を見つけない。

見つけて、埋葬してあげたい。

いつか…貴方を思い出に出来る日までは探したっていいよね。

浮かんだ涙をこしこしと乱暴に脱ぐって、私は散歩を続けることに

した。

彼女の気持ち（後書き）

と言うわけで彼女（一番上の姉）の話でした。

やっと“私”が犬だったと断言できました。

いやあ、何となく書く機会がなくて今まで延びたのです。

お気に入り登録ありがとうございます！

もう何話が閑話を書いたら本編に入りたい…とは思ってます。

遊び

「きーーーーーやあああああああ！！！！」

甲高い絶叫が辺りに響きわたると、ドシンという音と共にダンの背中に衝撃が走った。

思わず避けそうになるのを押さえつけ、できるだけ衝撃を減らすように丸めていた背中をを着地の瞬間に反らして再び丸めると落ちてきた者はぼーんと空に投げ出される。、それを何回か繰り返して最終的には背中を滑り降りて終了。

というのがここ数日の子供たちがハマっている遊びだった。

原因はリサである。

さっきの絶叫も怖いからではなく喜んでいるのだからたちが悪い。

「つぎっ！つぎぼくー！」

「だめだよおお！わたしだもん！順番だもんっつ！」

ぎゃあぎゃあと言い争いをする子供たち。

どうでもいいが一人一回では無かったのだろうか？もう一人二回はしている。

そもそも私は拒否したはずなのに何でこんなことになっているのだろうか？

いや、分かっている。

ユーナの「かみさまおねがい。」（うるうるさせた瞳つき）に負け
た私が悪いのだ。
悪いのだが……っ！！

「いやッホーーーーう！！」

物思いに沈んでいると再び背中に衝撃が走ったので慌てて先程と同じように何度か跳ねさせると背中を滑り降りさせた。

ちなみに私遊びはこれだけではない。

初めは毛を触るだけだったのだが、慣れてくると色々してくれた。
ちなみに発案者はほとんどリサである。

- ・尾をみつあみにしようとしたり。
- ・魚釣りの棹にしようとしたり。
- ・踏み台代わりに使ったり

あ………思い出したら何だか泣けてきた。

目尻に浮かびそうになった涙をこっそりぬぐった私は遊びを続けた。

……この後、勉強の時間を忘れて遊び続けていた私たちはソフィア
にごっすり怒られるのだがそれはまた別の話………

遊び（後書き）

体調崩してまして更新遅くなりました。

短いですが、リサがやらかしたことをちょっとだけ書いてみました。
子供なのでこんなものです。

シッポ釣竿とか可哀想だけど水につけてピルピルしてる姿妄想したら可愛すぎて悶えた。

序章（前書き）

説明の回です。

序章

こちらの世界に呼び出されてから3年がたった。

一年目は無我夢中で子供たちに混じってこちらの世界について勉強した。

それ以外にもソフィアに魔術を教えてもらったりした。

一年経った頃には四代元素の魔術（火・風・水・土）の初級魔術ならば扱えるようになっていた。

二年目は一年目に習ったことの応用と、自分の力をより精密にコントロールできるようにするための訓練だった。繊細かつ大胆に！が合言葉の訓練はとても大変だったが、お陰で力の使い方は格段に上がり、上級魔術も使えるようになった。

ちなみに私の癒しの力は魔術ではなく魔法に分類されるらしい。見分けかたとしては

訓練次第では誰でも扱うことができ、発動のためには呪文を唱えなければいけないもの〓魔術

使う者が限られており、呪文を必要としない上に魔術よりも強力な効果を持つ力〓魔法

という風に分けられているそうだ。

そして魔法はものすごく珍しいので使える者は自分が魔法を使えることを隠すのが普通なんだそう。私が魔術を教えられたのもこのせいだということらしい。

国についても色々と学んだ。

まず、この大陸はセザール大陸と呼ばれている。

国は

人族が治めるユリティシア王国

同じく人族が治めるソール神国

竜族が治めるテネブラエ魔国

の三国。

ユリティシア王国は二つの国に挟まれてはいるが国境間を巨大な山脈が走っているために戦争もなく気性が穏やかな者が多い。住んでいる種族も人族・獣族・神族・精霊族と多岐にわたる。

ソール神国は太陽神を唯一絶対の神様として信仰していて、人族しか入れない上に入るためにはとても複雑な手続きが必要なのだそうだ。

テネブラエ魔国は魔力の基となる魔素が強い土地のため、神族や精霊族などの種族が多く住んでおり、獣族や人族は少ない。獣族は魔術が苦手なものが多く、人族だと魔素が強すぎて体調を崩してしまふものが多い為、定住しにくいのだそうだ。

うん。こうやって復習してみると以外に覚えているものだな。

満足感とともに私は一本になっている尻尾をパタリと動かす。

そうそう、3年のうちに私は人に化ける魔法を覚えていた。

耳と尻尾はまだ消せない為、見た目は獣族だ。

ちなみにこの姿に初めてなったときのソフィアの反応は物凄かった。周りがドン引きしているのも意に介さず興奮しまくって、最後には何故か涙を浮かべていた。

正直、トラウマです。

人形になれるようになった頃から、私の思考は限りなく人間くさいものになったようだ。それと同時に元の世界の知識が私の中に何故か息づいている。

元・犬であった私は最初は混乱したが今はそれにも慣れた。考えるのわ放棄したとも言っ。便利だしな。

そんなこんなで私は今日も元気に魔術の修行に勤しむのだった。

序章（後書き）

明けてましておめでとうございます。

やっとこさ二章が始まります。

鈍亀更新ですが、よろしくお願いします。

魔術（前書き）

ソフィア視点。久々に三人称で書いたらやたらと時間がかかりました……（苦笑）

魔術

拝啓、今は亡きお婆様。

私は今、とても困っています。

ああ、この現状をどうしたらよいのでしょうか？

助けて下さい！お婆様！！

嚙様の祠の周りにはかなり大きな空き地が広がっている。

これは出現された嚙様の大きさがとても大きいのと、力の練習に使えるようにと配慮されているからだ。

そして今、ソフィアの目の前では獣族のような姿になった嚙様であるダン様がふさふさとした尻尾をゆらゆらとゆらしながら気楽な調子で最上級魔術を使うための呪文を唱えていた。

「えーつと………祖は力なり。その焰は純粹にして美しき白。総てを燃やし、浄化せよ。

白き焰の乱舞！！

「
唱え終わると同時にダンの周りに白い鬼火のようなものがいち、にい、さん……10。浮かんでいる。人形のダンは獣の姿を引き継いで銀の髪に少し垂れた優しい紫の瞳。ほっそりとしていながらも必要な所にはしっかりとついた筋肉が見てとれる。」

そんなダンの周りに白く輝く鬼火がくるくると舞うように浮かぶ様はとても美しい。

そんな美しい光景をソフィアがうつとりと見つめていると、

「いつてらっしゃーい」

とのんきな声でダンが鬼火たちを広場に放った。

そのとたん、鬼火たちは物凄い勢いで広場に点在する木に藁をくくりつけた簡易の目標に飛んでいき

ゴオオオオオオオツ！！

……熱風と轟音を撒き散らして、目標を灰の欠片も残さずに燃やし尽くしました……

「ダン様……今のは上級魔術ですよね？」

「そう。昨日教えてもらったから早速使ってみたんだけど、何か凄いいね……」

使った本人もポカンとしているが、周りで見学していた子供たちはあまりの威力に身を寄せあつて呆然としている。

そしてソフィアは頭を抱えていた。

それもそのはず。

上級魔術は呪文を唱えれば発動する初級魔術とは込める魔力もコントロールの繊細さも段違いに難しい。

人族で使える者は一握り。魔術に長けた魔族ですら10人に一人使えるかどうかだ。

そんな難易度がバカ高い術を気楽に…鼻唄さえ歌いそうな様子で成功させたのだ。

頭を抱える以外にどうしろと!?

「いやー、でも成功するとは思わなかった。

これもソフィアとの訓練のお陰かな。」

そう言つて爽やかに微笑むダンにソフィアは顔を上げた。

「否定しませんが、初めての使用で成功しただけでなくこの威力…

これは紛れもないダン様の实力です。」

真顔で諭すと「そうなのかな?」と納得するダン。

子供たちと戯れ、一緒に勉強し、人形をとれるようになってから加速度的に“人間臭く”なってきたダンであるが、ソフィアや子供たちの言う事はほぼ鵜呑みにしてしまう。

元の性質が、ソフィアたちを信頼してくれているのか……後の方が強いと思うのはソフィアの自惚れではないと思つている。

「とにかく、ダン様が上級魔術を扱えることはこれで確定しました

ので、これからは初級・中級と同じく呪文の暗記と発動までの時間短縮。それと精度も上げていきましょう。」

「わかった！でも、上級魔術なんてそうそう使うことなんて無い気がするんだが…」

「そうかもしれませんが出来ることはやっておくべきです。」

さあ使うぞ！って時に呪文忘れて使えない…なんて事があれば大惨事ですしね。

備えあれば憂いなし！ですよ。」

につこりと笑って締めくくるとダンは気圧されたように頷いた。

「それでは昼までは休憩としますので子供たちと一緒に的后片付けと新しい的の設置をお願いします。」

その間にお昼を作っておきますので。」

「了解！」

「お昼」の言葉に笑顔で敬礼すると「えーめんどくさいよー」などと文句を言う子供たちを引き連れてダンは後片付けを開始した。

しばらく様子を見てもサボる様子は見受けられなかったのでソフィアは祠の裏に設置された簡易の竈に火を入れて昼食の準備を始めるのだった。

魔術（後書き）

いつもこんな稚拙な文を読んでいただいております m

（――） m

突然ですが

水・土・風の上級魔術の呪文

を募集します。

お気軽にメッセージください。

ご意見や感想などもお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8979x/>

噛様

2012年1月12日22時57分発行